

主 題：神に仕える人 2

聖書箇所：ローマ人への手紙 1章8－15節

神に仕える人、それがパウロでした。そして、私たちイエス・キリストを信じる一人ひとりも同じで、私たちは神に仕える者に変えられたのです。かつて、私たちは神の敵であるサタンに仕えていた者ですが、神のあわれみによってそこから救い出され、神に仕える者となったのです。パウロはどのように神に仕える者として生きたのか、どのように彼は神に仕えて行ったのか、みことばは私たちにとそのことを教えてくれるのです。前回から私たちは、このパウロがどのように主に仕えて行ったのか、どのような人物であったのか、そのことを見て来ました。

☆神に仕える人ーパウローの特徴

1. 神を知っている人

パウロは確かに神を知っていました。私たちは1：8のみことばを通して、神に仕える人パウロがどういう人であったのかを垣間見ることができます。彼は主を知っている人物でした。主がどういうお方か、主がどのようなことを望んでおられるのか、そのことをよく知っていた人です。頭で知っているだけではなく主を心から受け入れ、主と個人的な関係を持っていました。彼は神がすべての罪人が悔い改めて救いに至ることを望んでいることをよく知っていました。ですから、パウロは同じように人々が救われることを望み、その罪人が救われたときに大きな喜びをもったのです。しかも、その救いのみわざはすべて神のわざであることを知っていたゆえに、そのみわざを為しておられる神をいつも称える、そのような人であったことを私たちは見て来ました。

2. 神を愛する人

二つ目に彼は主を愛する人でした。9節に「**私が御子の福音を宣べ伝えつつ霊をもって仕えている神があかしてくださることですが、…**」とあります。

(1) **霊をもって仕えていた**：パウロは「**霊をもって私は主に仕えている**」と言います。つまり、パウロは半分だけ神に仕えて、半分だけ自分の好きなようにという生き方ではなくて、誠心誠意、自分の全身全霊をもって、自分のあらゆるものをもって主に仕えていたことを私たちに教えています。彼はすべてのことを主のために、主の栄光のために為していました。

(2) **御子の福音を宣べ伝えつつ仕えていた**：また、彼は「**御子の福音を宣べ伝えつつ**」と言っています。彼はすべてのことを福音宣教のために行なったことを見たのです。彼はどのような心をもって生きていたのか、どういうことをしながら生きていたのかを教えてくださいました。彼は、その働き、彼がなすことすべて、彼が語ることすべてをもって、キリストのすばらしい福音が一人でも多くの人に伝わってほしいと願ったのです。彼はIコリント9：23でこのように言いました。「**私はすべてのことを、福音のためにしています。それは、私も福音の恵みをもとに受ける者となるためなのです。**」と。彼が望んだことは、この福音を人々に宣べ伝えることによって、一人でも多くの人に知ってもらうことによって、福音によって救われる人々が起こされることです。そして、その祝福に自分も与りたいとパウロは言うのです。なぜなら、人が救われること以上に大きな奇蹟はないからです。彼はそのことを願いながらこの働きを心から行なっていたのです。それが神を喜ばせることだと知っていたパウロは、そのために生きたのです。これはまさにクリスチャンの姿です。私たち神の恵みによって救われた一人ひとは、こんなにすばらしい救いがあることを一人でも多くの人に知ってもらいたい、また、このようなすばらしい救いを与えてくださった主のすばらしさを一人でも多くの人に知ってもらいたいと願います。私たちのすべての罪、過去の罪だけではない、現在の、そして、未来の罪がキリストによって完全に赦され、聖い神の前に立つことが赦され聖い者に生まれ変わるという、この救いのメッセージを人々に知ってもらいたいと、救われた人なら当然そのことを願って歩むはずです。パウロの頭の中にはそのことしかなかったのです。何とかこの救いを知ってもらいたい、ここにしか救いはない、そして、こんなに偉大なこんなにすばらしい主がおられることを多くの人に知ってもらいたいと願ったのです。

なぜ、パウロはこのように生きたのでしょうか？なぜ、パウロはこのために自分のいのちをかけたのでしょうか？なぜ、このためだけに生きようとしたのでしょうか？それは主を愛していたからです。神によって愛されていることがわかったパウロ、そして、自分の醜さがわかったパウロ、どうしようもない罪人であることがわかったパウロ、こんな自分のためにいのちを捨ててくださった神を知ったパウロは、その方を心から受け入れて、その方に私の感謝を現わして行こうとするのです。これが神に仕える人です。私たちは救われる前、神には仕えていませんでした。神の敵であるサタンに仕える者として私たちは生

まれ、神に逆らい続けて来たのです。ですから、当然、神の怒りを買って私たちは永遠の滅びに至ってしかるべき者なのです。しかし、神はこのような私たちをあわれんで罪から救い出し、生まれ変わらせてくださったのです。この救いのすばらしさ、救われるために神が払ってくださった犠牲の大きさを知っている人たちは、当然、この方のために何をしようかと考えます。何をもちてこの方に感謝の気持を現わして行こうかと考えます。だから、私たちは主に仕える者になるのです。強制されてそうなるのではありません。サタンに仕えていた者が生まれ変わって新しい主人、神に仕える者になったのです。どちらにも仕える者ではないのです。パウロはそのことを私たちに教えるのです。そして、教えるだけでなく、パウロは主を愛し、主に感謝して、主が喜んでくださることを一生懸命選択して歩んで行ったのです。言い方を変えるなら、彼は神の命令に忠実に従い続けて行こうとしたのです。パウロはピリピ1：20でこのように言います。「私がどういふばあいにも恥じることなく、いつものように今も大胆に語って、生きるにしても、死ぬにしても、私の身によって、キリストのすばらしさが現わされることを求める私の切なる願いと望みにかなっているのです。」と、パウロが望んでいることはただ一つ、どれだけ生きるかとか何をするかよりも、私は生きていても死んでいてもこのキリストのすばらしさが明らかにされること、そのことが多くの人々に伝わって行くことだということです。彼はこのように願いながら一生懸命、誠心誠意、主に仕え続け、従い続けて行ったのです。どんなときでもこの主への愛がパウロに従順を生み出して行ったのです。この働きのためにパウロはいのちがけで生きたのです。そのことをこのみことばは私たちに教えています。

神に仕える人、パウロはまさにそうでした。しかし、このような生き方をしたのはパウロだけではありませんでした。実は、ペテロもこのようなことを私たちに教えています。Iペテロ2：12「**異邦人の中であって、りっぱにふるまいなさい。**」と、「りっぱに」というのは「良いこと、道徳的に賞賛に値すること、真実を話し正しいことを行うこと」です。「ふるまう」というのは生き方そのものです。そのように生きなさいということ、ライフスタイルのことです。つまり、ペテロが言わんとしていることは、あなたたち救われた者は、この世であって神の前に道徳的に正しいこと、神の前に賞賛に値すること、また、常に真実を話して正しいことを行ない続けて行きなさい、それをあなたの生き方にしなさいということ、ペテロが言うように、教会に来ているときだけ、クリスチャンといっしょにいるときはクリスチャンらしくしているけれども、教会を出てしまうと自分の好きなように生きる、そのような信仰はどこかおかしいのです。パウロにしてもペテロにしても信仰の勇者たちはそのような生き方をしなかった、生まれ変わった者として、神に仕え続けて行く者として、彼らはともに集まっているときも一人でいるときも、仕事についているときも学校にいるときも家にいるときも、どんなときも主に仕える者として生きたのです。そのように私たちが生きるならすばらしい証がなされるということを彼は言っています。Iペテロ2：21-23「**あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。キリストは罪を犯したことがなく、その口に何の偽りも見いだされませんでした。ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。**」、どのようなことがあってもそのように生き続けて行きなさい、神に仕える者となったあなたもこのようにキリストの模範に倣って歩んで行きなさい、そのことを神は望んでおられると言うのです。同じIペテロ3：9を見ると「**悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。**」とあります。あなたが神の前に正しく歩もうとするなら、必ずあなたは自分の生活にいろいろな問題を招きます。辛いことも悲しいこと、ばかにされることもあるし、笑われることもあるでしょう。だからといってその悪に対して悪で報いようとするのではなく、正しく生き続けて行きなさい、それがあなたの生き方であるように、かえって、そのような人々を神が祝してくださるように祈りなさい、悪に対して善で応じなさいとみことばは教えてくれるのです。つまり、周りの人があなたにどんなことをしようと、あなたの責任はどのようなときにも神の前に正しいことを選択して生きて行くことです。

そのことを教えた後、ペテロはこのように言います。もう一度、2：12に戻って「**異邦人の中であって、りっぱにふるまいなさい。**」、神を知らない人たちの中であって正しいことを行ない続けて行きなさい、神が喜ぶことを行ない続けて行きなさい、「**そうすれば、**」と続きます。結果です。そのように生きたなら結果がどうなるのかということです。「**彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。**」、人々はあなたに対していろいろなことを言うかもしれない、いろいろなことをするかもしれないけれど、あなたがその中でも正しく神に喜ばれることを選択しながら歩んで行くなら、あなたのその生き方はすばらしい証となり、それによって神の栄光が現わされ、人々が神をあがめるようになるということです。12節で言うように「**おとずれの日に神をほめたたえるようになります。**」、なぜなら、彼らが救われるからです。あなたの証によって信じる人が出て来るのです。だから、彼らはそのときに「**神をほめたたえる**」と。ペテロも

私たちに教えてくれます、あなたは神に仕える者になったと。すべてのときに神に喜ばれることを継続して行くな、間違いなく神はあなたを使ってくださって、このすばらしい福音が人々に伝わって行くと言います。「あなたがたのそのりっぱな行いを見て」の「見る」ということばは「観察する」という意味です。世の中の人々はクリスチャンであるあなたの生き方を観察しているのです。あなたの言っていることが本物かどうか、あなたの言っている救いが本物かどうか観察しているというのです。「おとずれの日に」、キリストが再臨されるときに彼らは「神をほめたたえる」と言います。ある人々はクリスチャンのよい行ないを見て、救いへと導かれ「神をほめたたえる」というのです。

今、私たちはパウロの証を聞き、そしてペテロの証を聞きました。彼らが主に仕える者である私たちクリスチャンに教えてくれることは、私たちが何のために生きているのか、だれに仕えているのかを覚えなければいけないということです。私たちはこの主のために生きている、主のすばらしさを証するために生きている、それが私たちなのです。彼らに共通していたことは、彼らは日々の生き方を通してキリストを証していたということです。なぜ、困難の中そのような生き方を継続したのか、答えは簡単です。パウロもペテロも主を愛していたからです。主を愛するその愛がそのような生き方へと駆り立てたのです。主への愛が主の望まれる生き方への動機となっていたのです。私たちもだれかを愛しているとその人を喜ばせようとし、言い方を変えれば、その人を悲しませることから離れようとし、私たちが神を愛しているなら、その方が喜んでくださることを行ない、その方が悲しまれることから離れようとし、彼らはそのようにして生きたのです。

信仰者の皆さん、あなたはこのようにすべてのことを通して主のすばらしさ、この主の備えてくださった救いを知らせるために救われ生きる者となったということを忘れていませんか。何のために神が私のような者を救ってくださり、このようなすばらしい祝福を与えてくださったのか、何のために神はこの今日という新しい日を与えてくださったのか、その目的を忘れていませんか。そのことについて考えるためには、あなたは私の神への愛は成長しているかどうかを考えなければいけません。パウロはエペソの教会の人々が愛において成長することを望みました。エペソ3：17-19に「愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができるようになります。…」とあります。イエスが十字架で私たちのためにいのちを捨ててくださった、犠牲を払ってくださったことを私たちは学び悟りました。でも、悟ったといってもその理解には限界があります。パウロはエペソのクリスチャンたちが、神の愛を知っている彼らが、その愛においてますます成長して行くように、もっと神の愛を深く知って行くようにと願いました。なぜなら、私たちが神の愛において成長して行くなら、神への愛が増し加わって行くなら、私たちの生き方が変わって来るからです。頭でどんなに理解していても心が本当にそうです、神さま感謝しますと、そのように思っていないなら、私たちの生き方は変わって来ません。実は、ここに私たちキリスト者の問題があると思います。キリストへの愛が成長するどころか、もしかすると、その愛が冷たくなって来ている、そのようなキリスト者が多いかもかもしれません。主に喜んで仕えたいとか、主のために生きて行きたいという、かつての熱意を失い、救われ生かされている目的も忘れて、ただ何となく日々を過ごしている信仰者が多くなっているのではないのでしょうか。あなたはいかがですか？この救いに関して、また、主の恵みに関して、あなたの感謝は増えていますか？それとも薄れていますか？パウロは主を愛していること、主に感謝していることを生き方をもって証明しました。問題は、あなたがどうであるかです。あなたはご自分の生き方をもってあなたが主を心から愛していること、感謝していることを現わしておられますか？神に仕える人々、パウロはなぜ、ここまで徹底してキリストのすばらしさを伝えたいと願ったのか、それは人々から賞賛されるためではなかった、彼は神を愛していたからです。その神を喜ばせたかったのです。その神に、何とか自分は感謝をささげたかったのです。そこにあった選択は一つです。私は心からこの方に仕えて行こう、この方のためだけに私は生きて行こうと、それがクリスチャンなのです。残念ながら、私たちは様々な思いによって惑わされ、どこかで線引きをしてしまっています。ここまでは神のために、でも、ここからは自分のためにと…。キリストは私たちがそのような生き方をするためにいのちを捨ててくださったではありません。キリストが私たちに望んでおられることは「わたしに誠心誠意ついて来なさい」ということです。そのような信仰者こそ、まさにパウロが歩んだように神に仕える者にふさわしい歩みです。

3. 兄弟を愛する者

三つ目に、私たちが神に仕える人パウロのことをこのみことばから教えられることは、彼は兄弟を愛する者でした。クリスチャンたちを愛していたのです。9節の後半から10節に「私はあなたがたのことを思わぬ時はなく、いつも祈りのたびごとに、神のみこころによって、何とかして、今度はついに道が開かれて、あなたがたのところに行けるようにと願っています。」とあります。「あなたがたのことを思わぬ時はなく」と、パウロはまだ会ったことがないローマにいる兄弟姉妹のことを愛し、彼らのことをいつも考えていたと

言うのです。だから、パウロは彼らに早く会いたいと思っていた、彼らのところを訪問できることを期待していました。このような愛を私たちはもっているのでしょうか？ 私たちも本当にだれかのことを愛しているならそのような思いを持ちますが、驚くべきことは、まだ会ったことのない兄弟姉妹たちのことをパウロはこのように思っていたということです。皆さんもできるのです。いろいろなところで神は私たちの教会を用いていろいろな働きをしてくださっています。今も兄弟姉妹のことを聞きました。彼らのために祈ることができます。この地上で会うことはないかもしれませんが、天で確実に会います。私たちはいっしょになって福音を伝え、いっしょになってキリストにあって成長しようとしているのです。神はこの世界においていろいろな働きを為されていることを私たちは知っています。感謝なことに、私たちはこの間もロシアにおける働きを聞きました。世界の様々なところにおける神の働きの証を聞きました。神は確実に、この世界においてすばらしい働きを為しておられます。私たちはまだ彼らに会ったことがないし、この地上で会うことはないかもしれない、けれども、私たちは彼らに対して関心をもたないとか、彼らを愛さないとか、そのようになってはならないのです。神が救ってくださった多くの人々に対して、私たちも重荷をもって彼らのために祈ることが必要です。今日も私のところにアメリカからメールが届いていました。それは教会の皆さんに送られた手紙でした。そこに「浜寺のために祈りましょう」とありました。ほとんどの人たちはここに来ることもなければ、皆さんに会うこともないでしょう。でも、彼らは私たちのことを祈ってくれているのです。パウロは、実際に会った兄弟姉妹だけではなく、まだ会ったことのない兄弟姉妹に対して、彼らが神にあって兄弟姉妹であるゆえに、家族であるゆえに、彼らに対して深い愛をもったのです。私たちも見習うべきではないでしょうか？ 私たちの宣教師や彼らが働きを為している人々、会ったことはありませんが、私たちは少なくとも彼らのことを愛して祈ることができるのです。

◎パウロの祈り

パウロのことばにもう一度目を留めてください。パウロはまだ行ったことのないローマの人たちのことをいつも考えていたから、会いたくて仕方がなかったのです。10節に「**何とかして、今度はついに道が開かれて、あなたがたのところに行けるように**」と言っています。彼らのことを考え彼らのことを愛していたから、彼らのために祈り続けています。だから、10節にパウロの祈りが出て来ます。私たちもそうです。だれかのことを考えていると自然に祈りが出て来ます。心の中からその人のことを祈り始めます。「神さま、どうぞ彼を守ってあげてください」とか「彼らに力をあげてください」とか…。パウロのこの祈りを見たとき、私たちはパウロのことを知ることができます。信仰者とはどういう人なのか、それを見ることができるのは10節に「**いつも祈りのたびごとに、何とかして、今度はついに道が開かれて、あなたがたのところに行けるようにと願っています。**」と、そのようには言わなかった、私はあえてあることばを除きました。彼は「**神のみみこころによって、**」と言いました。わずかなこのことばが私たちにパウロがどういう人物であったかを教えてくれるのです。つまり、パウロは自分の願いどおりにすべてのことをしようとは決して思っていませんでした。パウロはいつも神のみみこころを求めて、そのみみこころに従おうとして生きていた人です。私たちにもそういう戦いがあります。私たちがこの地上において経験する戦い、それは神のみみこころに従うか、それとも自分の思いどおりに生きて行くかです。私たちは巧妙に自分の願い事がみみこころになるようにと願い、そのように言ってくれる人を探したりします。百人に話をして一人がそうだと行ってくれたら皆がそう言ってくれたかのように信じます。つまり、私たちがしようとすることは、神のみみこころに従って行くよりも、私の望みが神のみみこころになることを求めているのです。私たちが学ぶべきことは、自分のしたいことをみみこころに沿わせて行くことです。「わたしの名によって祈るならそれがかなえられる」とイエスは言われました。そうすると多くの方は、イエスという名を付けたら自分のほしいものを神はくださるのかと思います。そのようなことを言っているではありません。イエスが言われることは「わたしの名によって祈る」ということは、私たちが神のみみこころを求め始めるなら必ず叶えられるというのです。なぜなら、みみこころが成るからです。私の願いがみみこころになってほしいと求め、私たちは真剣に祈らなければいけない、神は聞いてくださるからと言いますが、それは違います。神は「わたしのみみこころをわたしは為す」と言われるのです。私たちの問題は、どうしてもみみこころが最善と思えないから、私の考えていることを何とか成し遂げてくださいますよと言うのです。いかに私たちが愚かで高慢かが分かります。自分の考えが神のみみこころよりも最善と思っているのです。私たちは神を知ることによって砕かれて行きます。謙遜にされて行くのです。パウロを見たとき、彼は自分を知り、また、神を知っていました。だから彼は「私にはこのような願いがあるけれど、私は主のみみこころが成るように願って、その主のみみこころに従ってこれからも生きて行きたい」とここで言うのです。

11-15節を見ると、パウロは彼らのために最善を願っています。私たちもそういう祈りの人になりたいものです。「神さま、どうぞ私のこの願っていることを与えてください」から「神さま、どうぞあ

あなたのみこころがなりますように、そして、私が喜んでそれに従う者に変えて行ってください」と。人々のために祈るときも「どうぞ神さま、彼らも同じようにみこころに従って歩いて行けるように、主よ、あなたが働いてくださるように」と。なぜなら、間違いないことは、神のみこころは最善だからです。なぜ、みこころを求めてみこころに従って行くのか、みこころがあなたにとって最善だからです。最善の神がなさることは常に最善なわけです。なぜなら、何が最善であるか分からない私たちがこれが最善だと言い切っているのです。私たちの信仰者としての歩みにおいて常に邪魔をするのは自我です。ですから、自分のやりたいことと、自分に対して神が望んでおられることとの二つの戦いの中であって、私たちが「主よ、たとえ私が望んでいることと違って、私はあなたの望んでおられること、あなたのみこころに従って行きます」と言う時に、私たちは神のすばらしい祝福をいただくのです。神のみこころに従う以外に神の祝福をいただくことはないし、神からの満足を得ることはないのです。みこころに従うというのは、明らかにその生き方が「主よ、私はあなたを信頼しています」ということを現わしています。なぜなら、自分がどう思うかではなく、神が言われることに従って行こうとしているからです。私はあなたのみこころを求めてそれに従って行きますというこの信仰の態度は、明らかに神の前に謙虚になって、神を神としてあがめ、私はあなたに従うしもべです、あなたに仕える者ですということを生き方で現わしていることになるのです。パウロは祈りの中にも、自分で何とか道を開いてローマに行こうとするのではなくて、神のみこころに従おうとしたのです。パウロは神の最善をいつも求め、その最善に喜んで自らの意志に従わせて行こうとして歩いてきたのです。

さて、訪問のことに関して、10節でそのことを祈っているのですが、その後、彼は何のために訪問したいのか、訪問の理由を11-15節に三つ上げています。

◎パウロがローマを訪問したかった理由

- (1) ローマにいる兄弟姉妹の霊的成長のため 11節
- (2) パウロ自身の成長のため 12節
- (3) 伝道のため 13-15節

このために、パウロはローマを訪問したいと言ったのです。けれども、先ほど言ったように、彼は「主のみこころなら主がそれをさせてくださるだろう」と、パウロはそのように思いながら彼らのために祈っていたのです。

- (1) ローマにいる兄弟姉妹の霊的成長のため 11節

パウロは兄弟を愛する人でした。そのことは9節の後半から10-11節、12節にも出て来ますが、11節を見てください。「**私**があなたがたに会いたいと切に望むのは、…あなたがたを強くしたいからです。」とあります。この「**強くしたい**」ということばは新約聖書の中に13回ほど出て来ることばですが、Ⅱテサロニケ2：17ではこのように使われています。「**あらゆる良いわざとことばとに進むよう、あなたがたの心を慰め、強めてくださいますように。**」と、テサロニケのクリスチャンたちが良い行ないをして行くように、良いことばをもって話をして行けるように、神があなた方の心を強めてくださるよというパウロの祈りです。明らかに信仰のことです。信仰が強められることによって、主に喜ばれる生き方を実践することができるよというパウロは願っているのです。同じⅡテサロニケ3：3には「**しかし、主は真実な方ですから、あなたがたを強くし、悪い者から守ってくださいます。**」とあり、パウロは神があなた方を強くしてくださる、あなたたちを悪から守ってくれる、つまり、悪に負けないよあなたたちの信仰を強めてくれると言っているのです。今敢えて、この二つのみことばを見ました。あなたがたが「**あらゆる良いわざとことばとに進むよう**」に、あなたがたがますます神の前に正しく神に喜ばれる生き方を、行ないにおいてことばにおいて為して行くよ、神があなたがたを強めてくれるよというよに使われました。3：3では「**あなたがたを強くし、悪い者から守ってくださいます。**」と、いずれにしても、この「**強くする**」というのはクリスチャンとして彼らの信仰が成長することを願っているのです。パウロは11節で「**あなたがたを強くしたい**」と言いました。パウロはローマのクリスチャンたちの信仰を何とか強めたい、何とか成長するよに助けたいと願いました。「**強くする**」というのは、他の箇所でもこのよに信仰の成長のために使われています。当然、パウロもローマのクリスチャンたちにそのことを願ったのです。ローマにいるクリスチャンたちを励まし、彼らの信仰が成長するためにパウロは尽くしたかったのです。

どのようにしてそれをするのか、11節に「**御霊の賜物をいくらかでもあなたがたに分けて**」とあります。霊的賜物のことばです。つまり、パウロは、彼に与えられた特別な「**御霊の賜物**」を用いることよって彼らを励まし、信仰を強めて行きたいと言っているのです。この「**御霊の賜物**」というのは、生まれつきもっている才能とは違ひます。霊的賜物は私たちがイエス・キリストを信じて罪赦されたときに、神が与えてくださったもの、神からの贈り物です。イエス・キリストを信じているすべての人がこの賜物もっています。だから、キリストのからだに属する者となる、すなわち、救いのことばです。クリスチャンはキリストのからだの各部分なのです。皆さんは「イエスを信じた人はキリストのからだの一部とされ

た」ということをお聞きになったことがあるでしょう。一つのからだを連想してください。いろいろな器官があるようにイエスを信じたすべての人はその器官のどこかに当たっているのです。手かもしれないし、指かもしれないし、目かもしれないし、口かもしれないし、キリストのからだに属したあなたは、そのからだのどこかの部分としての働きが神から望まれているのです。あなたは神からすばらしい働きをいただいたのです。霊的賜物を神はあなたに与えてくださった、何のためにそれが与えられているか、みことばはこのように教えます。Ⅰコリント12：7「**しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。**」と、明確です。神が与えてくださった霊的な賜物は自分のためではなく、他の人々の信仰の成長のため、他のクリスチャンたちの益となるために与えられたと言っているのです。Ⅰペテロ4：10には「**それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。**」とあります。「**それぞれが賜物を受けている**」と言うのは例外がないということです。イエス・キリストを信じているあなたは間違いなく神から特別な賜物をいただいているのです。では、その賜物をいただいた者として、その管理者として、その賜物を用いて互いに仕え合って行きなさいと、つまり、Ⅰペテロ4：10が私たちに教えることは、あなたには賜物が与えられ、あなたの責任はそれを用いて仕えることだということです。ですから、みことばが私たちに教えてくれていることは、イエスを信じたすべての人は働き人だということです。あなたは自分に与えられた賜物を神のために使い、そして、人々の益のために、信仰の成長のためにそれを生かして行くことが必要なのです。それが神があなたを救い、あなたに賜物を与えてくださった目的です。それを果たしておられますか？その務めを果たしていなければ、神からの本当の満足を得ることはありません。神からの祝福をいただくためには、私たち一人ひとりが神の前を正しく歩む必要があります。主よ、どうぞ私を使ってくださいと働きを始めて行くことです。パウロが教えているように、兄弟姉妹の信仰が成長して行くために、どうぞ、私を使ってくださいと。

今見て来たように、神が私たちに賜物をくださった、一人ひとりに神は特別な賜物をくださった、ここにおられるクリスチャンで賜物を持っていない人は一人もいません。例外はないのです。それは人々の益のためです。つまり、私たちクリスチャンは自分よりも他の人を優先しているのです。私たちクリスチャンの信仰が成長するために必要なことは、私たちが人々のために生きることです。霊的に問題をもつときは、他の人よりも自分を優先するときです。自分のために人々が何をしてくれるかを期待する、私たちがもし人からいろいろなものを期待し始めると、その期待が応えられなかったとき私たちは様々な問題を抱えるようになります。私は弱っている、このような問題を抱えているから皆がもっと私のことを構ってくれたらいいのと思っていますと、もし、その期待に応えてくれなかったとき、愛がない、冷たい、無関心だと、私たちはいろいろな批判をするのです。そのような歩みをしている人に信仰の成長は望めません。なぜなら、神はあなたが賜物を人の益のために用いるようにとそれをくださったからです。ですから、もし、あなたが賜物をいただいているがその賜物を用いていなければ、あなたの信仰は成長しないし、神の祝福をあなた自身がその愚かさによって留めてしまっているのです。

パウロはこの兄弟姉妹のことを愛して、彼らの信仰の成長のために尽くそうとしました。彼が考えたことは、まだ会ったことがないローマのクリスチャンたちの信仰の成長のために私は努めたいということです。少なくとも、彼ができたことはそこにまだ行ってはいませんが、今見て来たように、彼らがみこころに従って行くように、彼は彼らのために祈ることができました。どうぞ、考えてください。私は兄弟姉妹の信仰の成長のために最善を尽くしているかどうかを…。どうすればこの弱っている兄弟を励ますことができるか、どうすればこの問題を抱えている姉妹のために尽くして行くことができるか、どうすれば彼らの信仰が成長するために私が用いられて行くのか、何をすればいいのか考えなければいけないのです。そのようにして、私たちは人々の成長のために生きようとするのです。もし、私たちが自分のことばかり見る目を周りの人に向けるなら、私たち自身変わって来ます。もし、あなたの信仰がなかなか成長しないとすると、その一つの原因は、あなたは自分のことばかりを見ているからかもしれません。神は言われます。あなたに賜物が与えられたのは、あなたが皆の益となるためだから、その目的を果たすために先ず努めて行きなさいと。あなたは人々のために何をしておられますか？皆さんがともに集まるとき、あなたはどのようなことを望みながら集まっておられますか？もし、私たちがいろいろなことを証し合うとき、いろいろな問題や悩みを聞き合ったりするときに、どのようにしてその人を励ましてあげますか？休んでいる人がいるとき私たちはどのようにしてその人たちを励まして行けるでしょう？そのようにして私たちが兄弟姉妹のことを愛して、彼らの成長のために歩もうとするなら、私たちは変わって行くのみことばは教えてくれるのです。パウロは兄弟の信仰の成長のために最善を尽くそうとしていました。それが神に仕える者パウロの特徴だったのです。

(2) パウロ自身の成長のため 12節

そして、12節を見ると、パウロは自分の信仰も成長する、そのためにローマを訪問したいと言って

います。パウロは人々の成長のことを望みましたが、同時に、彼は自分自身も成長したいと思ったのです。12節に「**というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。**」とある通りです。

(3) 伝道のため 13-15節

そして、13-15節では何とかこのキリストの福音をローマに伝えたいと、そのことを話すのです。神に仕える人パウロ、彼は主を知っていました、主を愛していました、兄弟姉妹を愛していました。四つ目に、簡単に12節を見てください。

4. 謙虚な人 12節

12節「**というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたいのです。**」と、このことは神に仕える人パウロの四つ目の特徴をも表わします。パウロは非常に謙虚な人であったということです。謙虚な態度をもっていたことを私たちは見ることができます。彼は言うことができました、「私は使徒です」と。11節で彼は何とか早くローマに行ってあなたたちの信仰の手助けをしたいと言いました。その後で「**というよりも、あなたがたの間において、あなたがたと私との互いの信仰によって、ともに励ましを受けたい**」と言うのです。彼はローマ1:1で自分は神によって選ばれた特別な働き人、使徒であるということを明らかにしています。ここでパウロは「私は使徒だからあなたたちのところへ行ってあなたたちを教えてあげる」とそのように言うこともできましたが、パウロはそのようなことをしていません。パウロは「私がローマに行った時にきっと私もあなたたちによって私の信仰が励まされるでしょう」と言っているのです。彼はどんな時でも、どんな人からも学ぶことを知っていたのです。神が働かれるのはイエスを信じている皆さん一人ひとりにです。ここにおられるイエスを信じている皆さんには、神はすばらしい働きを為してくださっているはずですが、私たちがそのような皆さんのうちに為される神のみわざを聞くと、心が励まされます。信仰が強められます。忘れていたことに気づかされたりします。再び、確信に燃え立つこととなります。神はそういう方だと。私たちがいつも気づくこと、それは人から学ぶことはたくさんあるということです。人々のうちに働いている主のみわざを見るとき、私たちは大きな励ましをもらいます。パウロの態度を見たとき、彼はいつも学ぼうとしています。彼はこの地上にいる間、神のことをもっと知りたいと思いました。神のことをもっと学んで行こうとしました。そのような態度をもって彼は生きました。

私たちにとって大切なことは学ぼうとする態度です。それをするなら、私たちはどのような状況からも学ぶことがたくさんあります。私たちが目を開いてみると、子どもたちから学ぶことがたくさんあります。その純粋な信仰から教えられることが山ほどあります。信仰の浅い人たちの喜びを見て、かつての自分もそうだった、今の自分はどうかと教えられることがあります。私たちは毎日神からいろいろなことを教えられています。大切なことは、そのレッスンを学ぶかどうかは私たち次第だということです。パウロは、もう私は十分に学んだから皆さんを教えるだけですとは言いませんでした。彼は人々から学ぼうとしたのです。私もいろいろな集会に行きつづけていつも感じることは、私が為す教えよりも人々から受けることの方が大きいということです。私は多くのクリスチャンたちに出会って、彼らのうちに働いておられる神のみわざを見て励まされています。それはこの教会においても同じです。皆さんの信仰の生きざまを見て、皆さんの主への愛を見て励まされます。そのようにして私たちはお互いに信仰を助け合い、その成長のために尽くして行くのです。よく皆さんにお話するように、信仰が成長すればするほど、自分の醜さ、罪深さ、愚かさが見えます。なんて情けない、私はどうしようもない存在だと確信して行きます。そのときに、私たちはこんな者をこのように愛してくださった神に感謝をささげます。そして、自分のことを知っている人は自分を誇ることに恐ろしさを抱きます。なぜなら、私たちが誇るときに自分でない自分を人々に見せているからです。本当の自分は何ものも誇れない罪深い存在です。そうでしょう、自分を見た時に私たちの何を誇れるのでしょうか？私たちの知識でしょうか、経験でしょうか？それは全部神の恵みです。だから、パウロは「私にとって十字架以外に誇りとするものはない」と言ったのです。パウロにとっての誇りは自分の教育でも経験でも自分の働きでもなかった、パウロの誇りはキリストしかなかったのです。なぜなら、こんな罪深い私をこんなにも愛して、こんなすばらしい救いを与えてくださったからです。だから、神は彼を大いに用いたのです。私たちはこのプライドというものを捨てなければいけません。そのためには神のあわれみによって、私たちは自分を詳しく正しく知ることです。

神に仕えた人パウロの生きざまは、私たちに彼が主を知っていたことを明らかにしてくれました。主を愛していたことを明らかにしてくれました。兄弟を愛していたことを明らかにしてくれました。そして、謙遜であったことを明らかにしてくれました。もう一つ残りました。彼は兄弟姉妹だけでなく、未信者も心から愛した人でした。そのことが13節から記されています。次回見て行きたいと思えます。

私たち信仰者はしっかり神を見上げましょう。どんなにすばらしい祝福を神は私に与えてくださった

のか、人の目ではなく神の目で自分を見るように、神に助けを求めましょう。そうすれば、私たちはこの神の愛の大きさに圧倒されます。そして、私はこの愛を受けるのに最もふさわしくない者だと気づかされます。そのときに初めて私たちは自分のことが分かり始めるのです。そして、神のことが分かり始めるのです。神に仕える人々は主のことを知っている人です。自分のことを知っている人です。そして、そのすばらしい神の恵みに何とか応えようとして生きた人です。最初に話したように、あなたはもう既に神に仕える者と生まれ変わったのです。問題は神に仕える者としての歩みをあなたはしておられるかどうかです。あなたは主をますます知ろうと努力しておられますか？あなたの主への愛は成長していますか？兄弟に対する愛はどうですか？そして、あなたはご自分を知っていますか？そのような働き人を神は喜び用いてくださるのです。そのような働き人に神はあなたを変えてくださるのです。もしも、あなたがそのことを望むなら…。まさに、パウロやペテロが用いられたように神ご自身の栄光のために神はあなたを使ってくださるのです。問題は、あなたが聞いたことを実践しているかどうかです。どうぞ、このみことばに従って生きてください。このキリストを誇りながら生きてください。このキリストに仕えることに喜びを持ってください。私たちは生まれ変わらせていただいたのですから。